「大阪公立大学」への疑問

写真は朝日新聞6月27日朝刊1面トップ。プレス発表で昨日26日16時15分から、新大学名称の協議・決定を知った。NHKなどが事前に「大阪公立大学」で調整と報じていたので、名称に驚きはない。大阪維新お好みで言えば「副首都大学大阪」もありかとも思っていたが。それにしても、インパクトに欠ける名称だ。記事によると、維新幹部は将来の「大阪都立大学」に含みをもたせる名称だと語っている。新大学には、名称などより深刻な問題がある。

マンモス「大阪公立大」
「府市協調の象徴」名称決定
国公立3位の学生数 22年春始動

国公立3位の学生数の「マンモス公立大」というが、大学は「大きければいい」というものではない。なんのための新大学なのか、大学統合の理念が明確ではない。維新としては、「府市協調の象徴」「大阪都構想の先取り」のつもりだろうが、そんな理由で歴史ある大学が廃止され、新大学が設置されてよいのか。両大学の教職員や学生、そして卒業生らの声が聞き入れられたのか。記事を読んでいて、維新が推進する「大阪都構想」と似ている感じがしてきた。大阪市が廃止・分割され、特別区や一部事務組合が設置され、マンモス「大阪府」が誕生。二重行政を解消し行財政の効率化をめざすという。マンモス大阪公立大も大阪「効率大学」にならないか危惧する。

写真は新大学の森之宮キャンパス予定地である。大阪城東部地区のまちづくりの方向性（案）に対するパブリックコメントに次のようなことも書いた。

大阪城東部地区のまちづくりと新大学基本構想、なかでも新キャンパスとの関係がはっきりしない。なぜ、新キャンパスが森之宮の「もと建替計画用地」なのか。近隣団地から大学キャンパス計画予定地を眺めたが、約7千人の学生・教職員が集う場としては狭い。「イノベーション・コア」は、「大学の基本機能」＋「大学が先導役となり展開する機能」を中心に構成するとしている。後者に重点がおかれ、大阪城東部地区のまちづくりのテコとして、新大学が利用されている。「大学の基本機能」の方は、ある意味で「付けたし」の感じである。新大学基本構想とともに、直近に策定された「大阪スマートシティ戦略」も、東部地区のまちづくりに押し込んだ形になっている。全体として、はじめに跡地開発を活用した土地利用転換（土地ころがし）、大規模再開発があり、新大学やスマートシティなどが「あと付け」的に並べられている印象をもった。

写真下は大阪市立大学の本館前。「祝ご卒業」とあるが、関一市長時代に創設された「市大」が消えてなくなるのは残念でならない。

（2020年6月27日）